

【ポスター発表】

高校生と高齢者の交流活動とその評価

○ 岩手県立大学 吉田清子 (7952)

キーワード：高校生、ボランティア活動、華道

1. 研究目的

日本の少子高齢化に伴い、人口の高齢化率は著しい、また、18歳未満の人口も減少しており、統計局人口統計¹⁾によると、全体では127,799千人、平成23年15歳以上19歳未満は、6,075千人で、高齢者人口は、全体の23%となっている。

それに比較して、孫との同居率は低下しており三世同居率は厚生労働省²⁾によると、平成22年は、16.2%となった。このような状況から見ると、日常生活において、高齢者と19歳未満の孫世代が交流する機会は少なく、高齢者に対するイメージも低下しやすい。桂・佐藤(2008)が認知症高齢者に対する大学生のイメージ調査はSD法で行われ、「遅い」、「話しにくい」、「邪魔をする」などマイナスイメージが思考された。本研究では、高校生のボランティア活動を通じて得た高齢者への主観的感情や活動を通じて深めた内容を分析し、交流活動を評価するものである。

2. 研究の視点および方法**(1) 調査対象**

A高等学校の高齢者との交流参加者総勢52名に質問紙調査を実施した。有効回答が得られた19名を分析対象とした。

(2) 調査方法

本調査は、A高等学校の華道クラブ活動の一環として、デイサービスセンターにおける交流会を行い、その事について次の2調査から回答を求めた。

一調査は、終了後に毎回、A高等学校の顧問の先生より質問紙を渡し、顧問の先生が回収するというように集合調査形式により行った。その際には、顧問の先生より研究の主旨が説明され、無記名自記式質問紙を配布し、顧問の先生が回収し、一旦学校で留め置きしたものを郵送で回収したものである。

二調査は、郵送で質問紙を高校の顧問に郵送し、顧問が学生に主旨を説明した上で、無記名自記式調査を行い、教員が留め置きしたものを、郵送にて回収したものである。

調査期間は、2011年9月～2013年3月であった。

(3) 調査内容**①交流毎の質問紙**

質問紙の内容は、交流者のコミュニケーションの状態、当日の花材、いけばなの形、交流者の性別、話かけたこと、話かけられたこと、交流を通じて印象に残ったこと、ボランティア経験の有無、華道経験、交流の良さ～悪さまでを5段階評価とした。

②交流全般に関する質問紙

本研究の質問紙は、ボランティア活動参加回数、高齢者について学んだこと、ボランティア活動の意義、高齢者とのつながりや地域づくりについては、自由記述で回答を求めた。属性（学年・華道への興味・高齢者との同居）、ボランティア活動の評価については、5件法による選択回答とした。

3. 倫理的配慮

調査に関しては、A高等学校長から文書で承諾を得た。顧問の先生には、この調査は任意であり強制するものではないことを口頭で説明した。研究報告についても、文書で回答を得た。

4. 研究結果

(1) 活動毎の評価

①接し方で理解したこと

コミュニケーションのとり方：しっかり大きな声で話す。話しやすい。

②感心したこと

花の名前をたくさん知っている。花をじょうずに生ける。

③高齢者へのイメージ

元気だった。楽しかった。明るい。笑顔が多い。気難しい。

④ ボランティア活動の楽しさについて、平均評価 4.27 (n = 19)

(2) 活動全体の評価

①コミュニケーションスキルについて

- ・高齢者に対する言葉の使い方、声の大きさ意識して話すこと
- ・あまり接することができない人と接することができ、いろいろな人との接し方を学ぶことができた
- ・わかりやすく教える秘訣、耳が不自由な人への伝え方

②ボランティア活動の楽しさについて、平均値 4.1 (n = 7)

5. 考察

ボランティア活動を楽しさから捉えると平均値は、4.1~4.2 と高くはないが、高齢者のイメージ、高齢者への接し方、高齢者への尊敬の気持ち、地域社会への貢献など、ボランティア活動を通じて経験した知見が自由記述に見つかった。

結果は、高齢者と接して、悪いイメージを持つ学生もいたが、継続して5回以上ボランティア活動に参加した学生もいた。同居率が低い中で、高校生のこのような活動は、今後地域を支える人材育成の面から意義ある活動ではないかと示唆された。

引用文献

1) 統計局ホームページ 2) 厚生労働省ホームページ、3) 桂晶子・佐藤このみ「看護大学生が抱く認知症高齢者のイメージ」『宮城大学看護学部紀要』第11巻、NO1、2008